

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第120号・平成11年9月1日

年表で読む

古平の歴史

《28》

■沢江学校の開校

鯉などの豊漁で勢いついた古平の町には、東北や新潟地方からの移住者が多く入り込んで来ました。明治五年に行われた郡内の人口調査によりますと、戸数三三九戸・人口一、一二二人とあります。

やがて生活も安定してくると、子どもたちの教育問題が起きてきました。古平郡内では、当時の道内では最も早く学校が設立されましたが、建物や通学などの関係で、その後、町内の各所に学校が建ちました。

現在の沢江町は、アイヌ語で「メナシトマリ」といい、メナシ川東風・トマリ川舟のかかる澗、入江、という意味から、風向きによって船の停泊地になっ

ていたようです。また、歌葉・沢江町は比較的早くから人が住み着いていて、就学児童の数も多かったことから、明治十五年（一八八三）、沖学校について、郡内で三番目に沢江学校が一教室で開校しました。

沢江町と歌葉町の間の丘陵地にはアイヌの人も住んでいて、子どもたちは浜中学校に通学していました。古平川には橋がかかっていませんでした。みんな料金を払って渡し舟で往来していました。ときには危険なこともありました。

沢江学校は、中通り奥の地藏堂のとなりとか、上町にあったとかいわれていますが、現在地のどこになるのかははっきりしません。

■沢江学校新築

明治二十一年（一八八五）五月、五百坪ほどの土地を無償で得ることができ、一教室と職員住宅をあわせて校舎を新築しました。三学級の編成でしたが、児童数は不明です。

■浜中小学校の分校となる

明治二十四年（一九一〇）当時、古平郡内にはすでに五つの学校（浜中小・新地小・新地小群衆分教場・沖小・沢江小）がありました。が、浜中尋常小学校を本校として、ほかの四校は分教場と名称が変わりました。

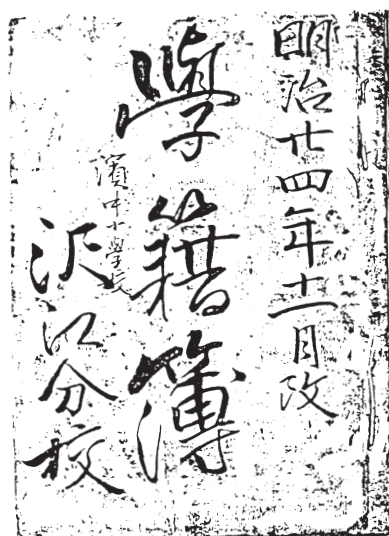
※記録では分教場とありますが、学籍簿の表紙には沢江分校と書かれています。

■教室を増築

開校当時は一教室で三学年まででしたが、その後児童数が増え温習科も置いたので、明治三十年（一八九七）、寄付金を元に、百坪の予算で教室を五坪半ほど増築しました。

■本校に統合され閉校

明治三十八年（一九〇五）十月、本校の増築が完成し、沢江分校が近い場所にあることから本校への統合が決まり、開校してから二十三年という短い期間でしたが、ここに沢江分校は閉校になりました。



記号	氏名	生年	従前	住所	入期	年月日	退学	年月日
一	田中太郎	明治	四年	古平	四年	十月	四年	十月
二	田中太郎	明治	四年	古平	四年	十月	四年	十月
三	田中太郎	明治	四年	古平	四年	十月	四年	十月
四	田中太郎	明治	四年	古平	四年	十月	四年	十月
五	田中太郎	明治	四年	古平	四年	十月	四年	十月

大正五年

12/30

二十七日以来の大時化は今日も止まぬ、四日間も荒れるとは実に未曾有のことだ、沢江、沖村方面の被害も大きく、歌棄山中辺の漁船や漁具はほとんど流出したとのこと、沢江も浜側の廊下はたいてい壊れた、橋の付近は実に地震の後のようだ。新年交礼会もこの惨状なので、遠慮し見合わせるという通知が来た。年取り、新年も来るというのに町中は大混乱だ。掛け取りに出ていた伊之君が戻って来たが、集金できたのは四十円余りだった。売り出し用の綿糸・網など、この時化で余市に止まったままにいる、二日はこの騒ぎで大打撃だろう。夕方から波は弱くなり、夜になってからようやく静かになる。二十九日の新聞によれば、小樽、銭函方面から、積丹、寿都、岩内方面まで被害が多とのこと、全道的な騒ぎであった。

12/31

起床八時、永らくの

大時化も今日はようやく晴れ模様になった。何しろ二十七日以来四日間も荒れたので被害多い。何十年来まれなることという。先年、出羽丸遭難当時以上なりと。古平全部被害は六、七万円位ならん。新聞によれば小樽並びに寿都、岩内方面も大損害とのこと。全道の荒れか。いよいよ本年も終りとなった。伊之君は掛け取りに行く。熊さんは勝手の

高野名幸作さんの日記から



[21]

手伝いをする。予は店、相当に忙しい。年取りも近いというのに、この度の大時化の後片付けで皆忙しい。浜はまだ片付かぬ。本年は、自分の家にとつては別に不幸なこともなく、一般に平穩無事であった。リングの作は大不作で悪いときは、鯀が大々漁で浜方は景気が良い。十月より諸物価の騰貴で綿糸、刺網類も暴騰したが、まず利益はあった

方だろう。若い人で亡くなったのは困ふさおさん、久々津かつさん、菊地謹治君などがある。実に人生はわからぬもの。七時まで店の仕事を終え、後、家内打ち揃ってめでたく年をとる。二時ころまで店の片付けや元日の支度をし、夜食を食べて休む。

大正六年

1/1

未明に、禅源寺で百

八つつの鐘をつく。朝、おしるこの馳走ある。十時に郷社(琴平神社)へ参拝する。先日の時化で大きな被害があったので、遠慮して年賀、回礼に歩く者がない。交礼会も中止になった。帰りに越中屋へ寄ったが、板倉はすっかり壊れてそのままになっていた。
1/2 開店早々に、二十歳くらい女の客があり綿糸を買っていく。初売りでの最初

の女客は縁起がいいというから、今年も店繁盛の吉祥ならん。その後も客が続く、切れ間なく、昼までに四百円ほど売る。七時にべたが七百十円の売り上げがあった。これは開店以来の売り上げだ。綿糸が五割以上も暴騰したので、金額も多くなったようだ。沢江、沖村、美国方面からの客が少ない。大時化がなかったら千円を超えていたかも知れない。

1/3

時化で休んでいた富丸が余市から来て、ようやく店のカレンターが着いた。

夜、古平座で新派の芝居見物に行く。

1/6

港町撞球場から、撞き初めがあるとの案内状が来た。古平もずいぶん開けたものだ。

1/7

夜食の後、一三倶楽部の球撞きを見に行く。△、△、△、刃さんなどが来ていてやっている。禅源寺の和尚さん、それに予も加わって始め、十二時ころまでやる。

—— 続く ——

断章小説【ふるさと遙か】

Ⅱ

青春の漂流

吉川 義雄

「バシッ」と平手打ちされた彼のほほが鳴った。

眼を怒らせた軍医が、無言のままあごをしゃくった。耳の検査は右から先らしく、左を先に出した彼の失敗を、白衣の軍医は容赦しなかった。

海軍に召集され、入隊した初日から、軍隊という世界が異様なまでに通常の世界とは断層の深さがあることを知った。

彼が小学校を卒業して、札幌の書店の小僧時代、北海道では陸軍大演習とかが始まった。

店には、その記念絵はがきがうず高く積まれ、白馬に乗った天皇を始め、陸軍だけでなく海軍の軍艦の写真も、金色にふち取りされて売られていた。

街中、憲兵とか、特高とか、密行刑事とかが目を光らせていて、「天ちゃん」とか言った大

学生や、うさんな者が片っぱしから引つ張って行かれたと、みんな妙に萎縮した顔を寄せてうわさをしていた。

職業軍人が肩で風を切って歩き、彼らの前に警察も遠慮して、何でも大目に見ていた。

国民は、知らず知らずの内に彼らを敬慕する風潮さえでき始めていた。子どもたちに「大きくなら何になるの」とたずねると、男の子ならたいてい「兵隊さん」と答えた。

彼の勤める書店の棚から、その筋の達しとかで、毎日のように発売禁止の本が消えていくようになった。

せっかく夢中で読み出した『蟹工船』が消えたり、『路傍の石』までもだめだと言われ

た。トゲトゲした、落ち着きのな

い世の中になっていた。青春真つただ中にいても、恋愛さえしても悪いような空気であった。

喫茶店の一隅で、さも悪いことをしているムードで、大学生の仲間が、ひっそりと、タンゴ『夢去りぬ』を聞いていた。

「富国強兵」の看板がビルに取りつけられ、「国民精神作興運動」とかで、神社と国民は強制的に結びつけられた。

電車の中でも、神社の前を通過するとき、車掌の声で一斉に頭を下げさせられた。密行刑事がみんな恐かった。

彼もいつか海軍に召集されることはわかっていたし、それが近いことも充分に知ってはいたが、それでも愛を打ち明けてしまった彼女がいた。

このころ、衝動的に若者たちが軍隊に志願して行つた。そうしなければ、徴用令で軍需工場で働かされた。街の中から若い人たちが次第にいなくなった。

初夏の日盛りの中、彼らは人目を避けるようにしてバスに乗り、郊外に逃れるように出た。

二人とも、終始言葉が少な

った。石狩川の一部だった沼は、周囲に木立が多く、蟬せむしぐれが降りそそいでいた。

徴兵猶予中の大学生のクルーが、航跡を残して去った後は、広い芝生の岸に人影は無かつた。

「死んじゃうの……」

長い沈黙の後に、彼女はポツリと言った。

「分らない……」

彼の言葉も短かった。

国は国民を護るのがその努めであるのに、「国のため」という転倒がこの国に覆いかぶさり、悲しみを増幅していた。その欺瞞(ぎまん)の構図は、今でも垣間(かま)見ることが出来る。「私、待っている。絶対帰って来て……私待っている……」

「うん、帰って来る。クソッ誰が死ぬか……」

どちらが先にのべた手か、握り合った掌に涙がそそぎ、青春の香る生命が泣きじゃくった。数日後、彼に召集令状が来たとの故郷からの知らせがあった。

△この稿 終わり▽

遙かなる故郷の思い出

わが闘病生活

[58]

橘 美哉 春

ともかく昼食ということで、家内がそうめんをゆでて持ってきてくれたが、汁の入った入れ物を持つことができずに落としてしまった。

「その左手はどうしたの」

「いすから落ちたときに、左肩から落ちて畳にぶつつけたんだと思う。別に痛くはないよ」

そうめんの入れ物を持つことができないので、テーブルの上のせたまま食べていたが、口の中へ入ったそうめんが、ダラダラと入れ物の中へ逆戻りしてしまう。口のしまりがなくなつてしまったらしい。

それに私が、自分で血圧を測るといって、長男夫婦が誕生祝いに贈ってくれた血圧計を出して、右腕に巻こうとしたがどうしてもできない。自分では巻

いたつもりだが、とんでもないところに巻いたらしい。家内はそうめんの一件や、私の行動がどうも変だと気がつき、横浜にいる娘のところへ電話で相談したら、すぐに救急車を呼んで病院へ連れて行きなさい、という返事だったという。

私はどこも痛くないから大丈夫だと、カラ元気を出して言いはつていたら、家内が娘に大分怒られたらしいので、私はしぶしぶ病院へ行くことに同意した。救急車を呼んだら、すぐにサイレンを鳴らしてとんで来てくれたので、近所の人たちをびっくりさせてしまった。

家内が救急隊員に病状を話したら、相手はすぐに病気を判断したらしい。それと家内が、私が明後日に入院を予定していた武蔵野日赤病院をお願いした

ら、すぐに日赤病院へ電話で問い合わせてくれたが、現在、救急病室はあきがないとのことだった。そこで、日赤病院はあきらめ救急隊員におまかせしたら、杏林大学病院へ連れて行ってくれた。杏林大学病院は三鷹市にあり、医療施設が整っていて優秀な専門医もそろっていると、以前、何かの週刊誌で読んだ記憶がある病院だ。

【脳梗塞】

病院に到着するとすぐにCTスキャン（コンピュータ断層撮影）検査、通称、輪切り検査ともいれているが、検査の結果、脳卒中のうちの脳梗塞と診断された。古平ではこれを『中氣が当たった』というが、よもや私が中氣に当たるなんて、夢にも考えたことはなかった。頭の中がボーとなつて混乱し、思考力もなくなつて、手帳へ日記を書いたもりだが、字がぐねくねして思うように書けない。

「厄病神のヤツ、また出て来たのか、こんちくしょう。さあー来やがれた。」

この日から、病室外の一人歩きは一切禁止になった。ナースコールのボタンを押すと、すぐ看護婦さんか、ヘルパーさんが車いすを押して来てくれる。どこへ行くにもお供つきの車いすだ。

入院した病棟は第二内科で、お昼のテレビ番組の「みのもんた」『おもいっきりテレビ』によく出てくる心臓医で、第二内科の有名な主任教授・石川先生のいる病棟だった。

八月十五日（木）

小便袋を取りつけられる。どこへ行くにもこの小便袋がお供して来る。あまりかつこうが良くないが仕方がない。脳波検査を受ける。

八月十六日（金）

病室の変更があり、八人部屋へ入る。私の主治医の先生二人が決まる。若い男の先生は岡部先生で、もう一人のこれも若い女医さんは堀先生。この二人の先生が、脳梗塞の私の面倒を見てくれることになった。

※（次ページ三段目へ続く）

海難事故は悲惨です。一家の働き手を失い、そして、遺体さえ見つかることが稀なのです。季節としても荒れる北洋、潮流の流れも早く、捜索に全力を注いでもついに手がかりは無かったようでした。

さらに船主にとっては、乗組員への補償問題があります。私のできることで、小樽の海上保安本部へ行って見たのです。そして、その一番偉い人が、いろいろと親切に教えてくれました。それから私は、勤めている日本生命の札幌支社へ行きました。じかに社長さんにお会いすることができて、保険金のことでお願いをしました。生命保険の保険金は、行方不明のときには一か年経たないと出ないのです。しかし、今回は多くの遭難者が出たことから、なんとかありませんでした。一生懸命お願いをしましたところ、生存してい

北洋に消えた十五人の ご冥福をお祈りして

第十一北光丸の遭難

竹内コト

た時には全額を返還するということで、保険金を出していただけることになりました。私は早速書類をいただき、ひとまず肩の荷が下りたような気持ちで帰りました。

この後、十一人の方について手続きをしてあげることができ、遺族の方へのささやかなお力添えができたのでは、と思っております。

事故から二十日余り経った三月十五日、第十一北光丸の合同慰霊祭が禅源寺で行われました。

喪主の山田安子さんは、昭和三十

七年に伊藤町長さんご夫妻の媒酌で、HBCの番組でテレビ結婚式を挙げられました。それがわずか八年でこのような不幸にあわれて、本当に慰めの言葉もありませんでした。

その後、二百カイリの問題が

※(前ページ四段目より)
体には二十四時間心電図が取り付けられ、これがナースセンタ―とつながり、私の心臓の動きが二十四時間監視されていることになる。

八月十七日(土)

心臓のエコー検査をする。私は入院の経験という、盲腸で近所の病院に土曜の夕方入院し、手術して月曜日のお昼ころ退院したので、入院の経験といわれても無いのと同じなので、何かと不安がつきまとった。

私のベットの一つおいて隣の五十代の患者も、私と同じ脳梗塞であった。私より一週間早く入院していた先輩だった。彼と同病なので親しくなったが、私は左足を引きずる程度の後遺症が出ているが、彼の後遺症は失

~~~~~

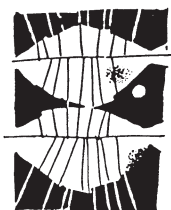
あり、遠洋への出漁はぐんと減り、海難事故は無くなりましたが、漁場を失い港も寂しくなっていました。

海難事故の続いた当時のことを思い出しますと、胸の痛む思いがします。

語症で、話をするときに最初の言葉がなかなか出てこない。彼は大変落ち込んでいて、半ばあきらめているようだった。

前に私の長男夫妻が見舞いに来たときに、家庭医学書で、脳卒中の本を買って着てくれと頼んでいたら、その本を持って来てくれた。ありがたい。大学病院の篠原幸人教授の著書で、『脳卒中の予防と治療』という本であった。この本を読んでみて、脳梗塞とは恐ろしい病気だということの、その全貌が初めてわかってきた。

—— 続く ——



遭難された十五人の方々のご冥福をお祈りして筆をおくことにいたします。

×

×

思い出のカニ船団をのみこんだ  
ベリング海青の書き深さよ

△終わり▽

# 吉平の名勝地

宝場

## 観音滝ものがたり

(2)

▽禅学会から祝聖会へ

禅源寺の五世住職であつた岳轉和尚は、宗派を問わず、仏教の教えを通して自己の修養に努め、家庭を守り、社会に貢献する活動を広めたいと考えていました。

主だった檀家の人や、寺を訪れる人たちにその趣旨を話し、仲間に入ることを呼びかけました。やがて、岳轉和尚が発起人となつて十数人が集まり、『禅学会』と名づけて会が発足しました。

その活動の内容はよく分かっていますませんが、月に一度、早朝に禅源寺の本堂に集まり、一同で読経をし、その後、和尚の部屋に集まつては歓談をしていたようです。

大正五年十一月三日、皇太子裕仁殿下（昭和天皇）の立太子

礼が行われたのを記念して、これまで禅学会を『祝聖会』（しゅくしんかい）と改称して、その活動をさらに広げることになりました。

当時の会員の名前や正確な人数などは分かりませんが、いろいろな記録から次のような名前が見られます。

秋田岳轉・高野常吉・高野勇太郎・高野名幸作・小林栄吉・福井庄平・原田吉太郎・原田喜助・梅野清太郎・佐藤長八・西島留太郎・高野常三郎・北浜嘉雄・藤田秀雄・西村泉・武川清・山田常次郎・木村慶七・三浦銀治・堀由次郎・米田岩吉・小野・山崎清治・安藤喜助・岩井米作・本間愛一・品田喜一郎

注1この中には、観音滝の命名式（大13年）以後、祝聖会に加入した人も含まれているかも知れません。

※（次ページ三段目に続く）

# 吉平ホトトギス会

心太スルリと喉を走りゆく 齊藤波留  
 独居死の友の納骨 山口悦子  
 一町を孤立させたる夏豪雨 大和田絵伊  
 病棟のすずもり帰る暑さかな 福井幸平  
 菩提寺の庭に降りくる蟬時雨 越野敏雄  
 老人の食を誘いしメロンかな 仲谷美砂  
 常連の顔揃いけり踊りの輪 大島喜恵  
 野良仕事夏至といえども陽の足らじ 関口勝志  
 箸置きをガラスに替えて夏に入る よしさき  
 果遠し白く輝くそばの花 山口浪  
 手の届くところに蜻蛉動かざる 仲谷比呂子  
 鷺の迎へてくれし城下町 越野清治  
 夫留守の手っ取り早き冷奴 室谷弘子

# 『おばあちゃんから 明枝ちゃんへの手紙』

渡辺 ハツエ

明枝ちゃん、先日はお手紙ど

うもありがとうね。久しぶりの  
お手紙、おばあちゃんすっかり  
うれしくて、何度も何度も繰り  
返し読みました。私のそばにあ  
なたがいて、二人で楽しく語り  
合っているような錯覚も起こし  
ました。あなたが言うように、  
自分の仕事が好きだと思うこと  
とは幸せなことだ、と書かれて  
ありました。全くそのとおり  
です。私も同感です。あなたは  
偉い、心からあなたに拍手をお  
くります。これからも、くれぐ  
れも健康に留意してお仕事に  
がんばってね。あなたの選んだ道  
です。夢に向かって、大きくは  
ばたいて行ってちょうだいね。

思い出すと、じいちゃんが病  
で倒れる十数日前に出漁した朝  
は、とてもよいなぎの日でした  
が、操業を終えて帰るころには  
南西の風が吹き出し、雨もまじ  
って寄港には向かい風、私は心

配になってきました。

わが家の『健生丸』はわずか  
〇九トンの小舟なのです。大  
型のボンボン船は次々と帰港し  
て、漁獲したタコを荷揚げして  
います。風はますます強くな  
り、雨も大降りになり、海には  
白波が立ってきました。

私は防波堤に上がった下り  
たりしながら、苦しいときの神  
頼みで、神仏にお助けをと思い  
ました。その間、どれだけの時  
間が経ったでしょうか。

「あつ、帰って来た」  
築港の灯台をかわして入って来  
る船が見えたのです。乗ってい  
る人影は、まぎれもなく主人の

※(前ページ下段から続く)

祝聖会は一日と十五日を例会  
日と定め、その日には季節を問  
わず、午前六時三十分までに禅  
源寺本堂に集まるのが決まりで  
した。

姿です。緑色の雨合羽(あまがっぱ)  
を着て、船外機の舵をしつかり  
と握っているのです。私だけが  
見た感激の瞬間でした。胸中、  
神仏に合掌して、主人の労苦を  
も心からねぎらったのでした。

明治四十四年、古平町に生ま  
れ、この町を故郷として八十五  
年、漁師になって六十余年間、  
海を愛し、自分の職業に誇りを  
持つて歩んで来た主人の人生  
は、まさに漁師人生でした。

この朝の出漁は、亡夫にとつ  
ては最後のひのき舞台であつた  
と思われまふ。

定刻になると全員で三十分は  
ど読経をし、それが終わると岳  
轉和尚の居間で、宗教や時事、  
町内のことなどいろいろな話題  
を取り上げては話し合いをし、  
歓談を楽しみました。また、例  
会日には和尚が茶をたてたり、  
ときには、わざわざ京都などか  
ら銘菓を取り寄せて振るまつた  
りしました。

冬季間は真つ暗なうちから家  
を出て、火の気の無い本堂での  
読経は相当こたえたようでした  
が、それでも例会の参加者は絶  
えることはなかったそうです。



## 川柳

赤トンボ老いの心も子に懐(なつ)る  
勿体ない口に出してる大正っ子  
もののふと武士の心と教わるる

石井 愛子  
老い独り周りみんながけむたがる  
孫帰り後は気抜けの老い独り  
老い独り周りに迷惑かけず生き

石井 愛子

渡辺 ハツエ

# 終戦の思い出 山



富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

今日は終戦記念日。戦後五十四年目となる。

昭和二十年八月十五日。

思えば、よく晴れた蒸し暑い日だった。

当時、私は、山形県では最大の企業だった酒田市の憐鐵興社(稲倉石鉱山と同会社)で、稲倉石鉱山のマンガン鉱石を原料にしたマンガン鉄などを生産している軍需工場の幼年工として働いていた。

その日は二十四時間の勤務を終え朝帰りの非番だった。

七人家族だった我が家は、病弱の父と小学生の妹が母方の実家に疎開。

長姉は、船舶の機関士と結婚し、その航海先は知らされな

ったが樺太らしかった。

次姉は昭和十九年の秋、十八才の若さで病死。

私より三つ年上の兄は志願で応召(海軍)され、家に残ったのは行商の母と私の二人だけだった。

家計は、定職のない母がその日に稼いだ日銭と、会社で一番下っ端だった私のわずかな給料だけだったから、私たち二人と疎開先の生活費にも事欠き、貧乏神の団体との同居生活が続いていた。

夜勤を終えた朝、作業主任さんが、帰る私たちを集め

「正午に、天皇陛下の玉音放送があるの、ラジオを聞くように」

と通達された。

朝の九時ごろ、複雑な気持ちのまま家に帰ったが、母は行商に出かけ、誰もいな居間には生温かいご飯と半身の干物が、粗末な飯台に並べられていた。

一人でご飯を食べ

「重大な玉音放送は何だろう」と思いつつも、仕事の疲れと眠気に襲われ、そのまま昼過ぎまで寝てしまった。

戦局は、日本の劣勢が刻々と迫り、ここ一年の間に、北方・南方の前線基地での玉砕が相次ぎ、本土においても東京をはじめ全国の主要都市が壊滅的な爆撃を受け、数日前には働いている工場も爆撃を受け、大きな被害を受けたばかりだった。

在学中に、すすんでグライダイーでの初級滑空訓練を受け、海軍航空兵(予科練)に合格し赤紙を待っていた私は、神州不滅を心底から信じ込まされていたのだが、内心では

「若しや負けるのでは」という、口に出せない不安がつきまとっていた。

会社では、偉い上役や大人た

ちが小さな声で

「天皇陛下が、国民に敗戦と降伏をお告げになるらしい」とささやいていたので、やっぱり降伏するのもかも知れないとの不安があった。

夕方、行商から帰ってきた母が、弱々しい声で

「天皇様が、アメリカに負けたと放送されたそうだ」と言った。

思えば、男勝りに働き、男以上に勝ち気だった母が、生涯ただ一度だけ私にみせた傷心し切った淋しい姿だった。

これからどうなるんだろうという不安が頭をかすめ、無言で夕飯を食べ、無言で寢床についた二人は、電灯を消した真っ暗な部屋で何べんも何べんも寝返りを打ち、まんじりともしないままに夜が明け、そして朝を迎えた。

その母は、苦勞に明け暮れ貧乏に翻弄されながら、幸せを見ることなく、もう亡ない。

八月十五日を迎え、今年も遠い遠い五十数年前のあの日のことが、私の脳裏をよぎった。